

ラックの屋敷やしきに住みついた天才錬金術士れんきんじゆつしファイリーは、今日も今日とて研究をしていた。

「ファイリー。いま大丈夫か？」

研究室にやってきたのは屋敷の主、ラックである。

「大丈夫だ。どうしたのだ？」

「ガルヴの散歩さんぽに行くんだが、一緒にどうだ？」

「タマの散歩か。助かるよ」

タマはファイリーの賢かしこくて可愛かわいい愛犬である。

「いや、タマと一緒にファイリーも散歩しないか？」

「私は……あまり外に出るのは、得意ではないから」

「そういうな。たまには外に出ないと身体からだに悪いぞ」

気乗りしないファイリーであったが、タマがファイリーの

袖そでを噛かんだ。

「タマもフィリーと散歩したいみたいだぞ」

「そうか。タマがそう言うのなら仕方あるまい。散歩に行こうではないか」

タマは尻尾しっぽを勢いよく振った。

その後変装へんそうをすると、フィリーは外に出る。

「たまには、太陽の光を浴あびるのもいいものだろう」

「まぶしい。だが不快ではない」

「そうかそうか。タマ、ガルヴゆっくり目で頼む」

タマと狼おおかみ霊獣れいじゆうのガルヴはとたとたと歩き出す。

たまに立ち止まって振り返り、フィリーを見るので気

を遣^{つか}っているのだろう。

その後ろをフィリーは小走りですついていく。

「無理はするなよ」

「無理などしていない」

しばらく走り、王都の門から外に出て平原に至^{いた}る。

平原を走るのが気持ちがよく、フィリーはどんどん走って行った。

「フィリー、意外と体力があるな」

「そうだろうそうだろう」

だが、それも長くは続かなかつた。

はしやぎすぎた。息が切れフィリーは一步も動けなくなってしまうた。

「安心しろ。責任を持って家まで連れ帰ろう」

そういつて、ラックはフィリーを背負った。

「面目ない」

「気にするな。次はもう少しゆっくりにして短時間にした方がいいかもな」

「……面目ない」

ラックに背負われたフィリーは顔を真っ赤にさせていた。